熊本大学教育学部紀要，人文科学
第58号，145－157，2009

CBR 保護者支援プログラム（第二期）の効果と改善点

—半年後のフォーカスグループインタビューの分析から—

福田沙耶花*・宮 本 美 哉**・肥 後 祥 治

The effectiveness and problems of the childrearing support program (version 2) based on the idea of CBR.

—From the analysis of a focus group interview after half a year.—

Sayaka FUKUDA・Miya MIYAMOTO・Shoji HIGO

(Received October 1, 2009)

The purpose of the study is to clarify the effectiveness and the direction of revisions of the childrearing support program for the families with high risk preschool children. The program based on the idea of community-based rehabilitation was developed by Higo' s research group. To attain the purpose of the study, the focus group interview with the parents who attended the program was adopted.

Analysis of the interview with the parents showed that there were following six significant traits in the program; (1) the existence of the child program, (2) sameness of the aims and circumstances of each family, (3) each speaking condition, (4) preparation for parent-child refreshment, (5) the existence of facilitator, and (6) method of calling for attendants. In addition, it was clarified that troubles that parents confront could be solved by suportting each other without a specialist, and they could gain a better understanding about the knowledge of the program focused by recognizing and encouraging each other. Some parents, who were empowered by this program, referred to the possibilities of managing of the program by themselves.

Judging from these results, it is useful to introduce the program to a real regional community for supporting to cope with problems of childrearing, which can be treated by non-specialists, in its early stages with fixing the limits of adaptation of the program. To develop the program into the community at a low cost, running by a parent group will be one of effective ways. Thinking about introducing this management way of the program into a community, it is very important to realize its effectiveness and to be empowered for continuing and improving the program by attending it. On the other hand, we should point out important findings that the efficacy of empowerment of the program was not keeping so long, in spite of the result of being empowered after attending it. We have to figure out to control this problem for introducing it effectively into a community.

Key words : CBR, Childrearing support program, Rehabilitation system for preschool age

1. 問題と目的

就学前期の療育システムは，早期発見・早期療育の必要性が高まっているにも関わらず学齢期における障害児支援システムに比べると，機関の数，専門性の高さ等，多くの問題を抱えている。このことは，施設中心型（IBR）の療育サービス提供システム下においては施設的ハードが確立していないと療育を受けることが難しい事を意味している（上野 2007）.

肥後（2003）は，地域社会に根ざしたリハビリテーション（CBR）の視点により，これまでの専門家中心のIBRの考え方からのパラダイムチェンジを提言し，地域の社会資源の戦略的運用と既存資源の再評価・再活用の重要性に関心を向け，その取り組みが就学前期の療育システムの構築に重要であると提唱した.

肥後の研究グループは，CBR の考えに基づく「地域での早期療育システム」の構築を目指し，2008 年に

* 熊本大学特別支援教育特別専攻科
* 熊本市立帯山小学校

①保護者支援プログラム，②子ども支援プログラム，③ボランティア養成プログラムを試行・検証した（第一期）（楢木野・筒井，2008）．そして，2009年に①～③のプログラムを改訂し，試行・検証した（第二期）（宮本・百田・半田，2009）．

本研究は，第二期の保護者支援プログラムに焦点を当て，プログラム（第二期）終了6ヶ月後に参加保護者らにフォーカスグループインタビュー（以降，FGIとする）を実施することで，プログラム（第二期）の有効性を調査し，その後のプログラムの修正点等を明らかとする事を目的とした．

2. 方　法

1）対象者

保護者支援プログラム（第二期）参加者4名（A，B，C，D）を調査対象とした．事前に電話で趣旨を説明し，FGIへの参加を依頼した．AとBは参加し，Bは夫（以下，夫とする）と共に参加した．Cは参加出来なかったためCの母親（以下，祖母とする）が代わりに参加した．Dは事情により不参加であった．参加した保護者の子どものプログラム実施時の概要はTable 1，6ヶ月後の子どもの様子はTable 2の通りであった．

Table 1　子どものプログラム実施時の概要

子ども	a	b	c	d
性別	女	男	女	男
年齢	1:8	2:11	2:3	2:9
遠城寺式発達指数	89.7	110.4	73.5	72.4
移動運動	89.7	116.7	83.3	72.4
手の運動	107.1	133.3	73.4	72.4
基本的習慣	71.4	105.6	55.6	84.4
対人関係	92.9	105.6	83.3	60.3
発語	81	95.8	63	39.6
言語理解	92.9	105.6	72.2	60.3

2）保護者支援プログラム（第二期）の概要

保護者支援プログラム（第二期）の対象者募集はX-1年7～8月にP自治体K地区の保健センター乳幼児健診担当保健師を通して行われ，実際のプログラムは同年10月から11月まで実施された．その際，ボランティア養成講座を受講したボランティアによる子ども支援プログラムも並行して実施している．子ども支援プログラムは1回2時間，全8回であった．その中で，別室で実施された保護者支援プログラムは実質1時間～1時間20分程度であった．全8回の概要はTable 3に示した．

Table 2　6ヶ月後の子どもの様子
（FGI・電話調査・アンケートより）

a	4月から幼稚園の未満児クラスに在籍。加配の先生をA児に付けてもらっている状態。母親の困りは、かんしゃくがひどい、「キー!!」となる、集団行動に入れない、ずっと手を洗っていることである。
b	春から保育園の一時保育を週1程度利用中。サッカーを始めて、親子共に充実している。子どもの発達も伸びており、専門の発達相談でも「だいぶ伸びたね～」と言われている。母親も手がかからなくなったと言っている。
c	祖母曰く、普段はママと過ごしている。用事がある時だけ祖母が見る。あまり言葉が出ないことを気にしている様子である。子どもの気になる行動として、固まってそこから動かなくなったり、その場から離れて行くことがある。母親曰く、そろそろ保育園に行くらしい。
d	情報なし。

3）手続き

（1）期日：X年6月Y日

（2）実施方法

P大学付属特別支援学校内施設で，調査対象者にFGIを実施した．保護者支援プログラム（第二期）の担当者である第二著者がファシリテーター，板書担当者が参加者の発言を板書し，ビデオに録画した．

（3）インタビュー項目

リサーチクエスチョンは，「保護者と子どもの最近の様子とプログラム参加はどのような関係があるか」，「振り返って，保護者は現在どのようにプログラムを評価しているのか」，「保護者同士の自主運営の可能性を高めるために何が必要なのか」「プログラムの修正が必要な部分はどのような点であるか」であった．FGIの中で，ファシリテーターが参加者に直接質問した内容は，「今日ここに来るまでの子どもの様子」，「最近のこういう時はどうしたらいいの？ということ」，「子どもプログラムの良かった事，改善点」，「保護者プログラムの良かった事，改善点，今振り返って思うこと」，「3歳から5歳のプログラムへ向けての提案」，「自主運営の可能性の有無」，「自主運営の困難性の要

Table 3　保護者支援プログラム（第二期）の概要

	活動名・内容	目的
1	知り合いになりましょう ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの概要，他己紹介，ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとの情報交換	お互いに知り合いになる 話の聴き方の提案 子どもの情報の提供
2	「お子さんがうまれてから、についてお話ししましょう」 話し合いと、Sharing	子どものことを話す経験 自分と子どもの関係を振り返る
3	「こんな時どうすればいいの」子どもに係わるよりよいｱｲﾃﾞｱを話合う、一週間の過ごし方の作戦を立てる	お互いの係わり方について、話し合う中で問題解決を行う。ﾒﾝﾊﾞｰを相談できる相手と意識できるようになる。
	「5～7 回のテーマを考えよう」	自分たちでテーマを考えることで、参加者のニーズに沿った内容になる。
4	「私と子どもの１週間-こんな風に過ごしました」 先週の話を基に１週間の生活を振り返る 専門家の話を聞く	子どもとの係わり方を振り返る 他者のｱｲﾃﾞｱに関心を持つ 専門家に尋ねたいことを聞いてみる
5～7	「自分たちで決めたテーマに取り組みましょう」 例：ストレス発散法，アサーションな自己表現，周囲の社会的資源を調べよう，専門家の話を聴こう，もっと仲良くなろう	グループで決めたテーマに取り組むことで保護者は主体的に活動に参加する。お互いの知恵を出し合って活動することは参加者のエンパワメントにつながる
8	ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ参加への振り返りをしましょう ﾌｫｰｶｽ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ・ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	自分の経験や感じたことを話すことで、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ参加への意味を振り返る
4・7	お子さんの姿をのぞいてみましょう時間の後半にﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとの係わりを見学し、子どもとの関わり方・遊び方などを話し合う。	子どもの姿を第三者的にみる 自分以外の人と子どもに関係を見る経験をする

因」であった．

(4) 分析方法

本研究では，参加者に記入してもらった振り返りシートとFGIによって収集された質的な情報を分析するためにグラウンデッド・セオリーを用いた．分析の流れは次のような手続きで行った．①リサーチ・クエスチョンの生成を行う．②逐語録を作成する．③リサーチクエスチョンを持ちながら逐語録全体を読む．④意味あると思われるデータの１行ごと，文章ごとにラベル付けコーディングする．⑤カテゴリーと他のカテゴリーを比較して，類似点や共通点のあるものをグループ化し，それをサブカテゴリーとする．⑥サブカテゴリー同士を比較して類似しているもの同士を更にグループ化する作業を繰り返す．そして，生成されたカテゴリー間の類似性と差異の発見を行き戻りしながら，絶えず比較分析を行い，最終的な理論の生成を目指した．

3. 結　果

第二期プログラム参加者４名中３名（A，B，Cの実母［幼児の祖母］）にFGIを実施した．Bの夫も同席し，会話は４人で進められた．

また，FGIで収集したデータをKJ法の手法を用いて整理し図式化した（Fig.1）．

会話は，1. 親子の近況報告や情報交換の場，2. 子育てにおける悩みや不安，3. 話し合いによる相互支援，4. 最近の子どもの変化の要因と親の気持ち，5. 親子支援プログラム（第二期）の良かった点，6. プログラムの改善点，7. 次のプログラムの提案・要望，8. 幼稚園・小学校への不満や不安，9. 自主運営の困難性と可能性の９種のカテゴリーに整理された．１～２のカテゴリーは子どもと保護者の現状に関する内容であり，３～４のカテゴリーは現在の子どもへの対応と変化に関する内容であり，５のカテゴリーは親子支援プログラム（第二期）の良かった点，６～８については，プログラム改善の方向性を示している．９のカテゴリーは自主運営の可能性と困難性を示す内容であり，そこから10. 自主運営に必要なものと11. あいまいなエンパワメントが導き出された．

1）親子の近況報告や情報交換の場

初対面の参加者（スタッフも含む）が多かった為，最初にそれぞれ簡単な自己紹介を行った．発話は基本的に司会者から質問しているが，参加者全員が話している当事者の方を見て，相槌（「うんうん」「へぇ～」など）をしたり，笑顔の表情であった．表情や相槌からも保護者同士が相手の話に関心を抱きつつ，真剣に話を聞いている様子が伺えた．「親子の近況報告や情報交換の場」というカテゴリーは「子どもや親子の日常」「夫の仕事や転勤」「くまさんクラブに対する子どもの記憶」「子どもの通うクラブや幼稚園の活動内容」の４つのサブカテゴリーに整理された．

(1) 子どもや親子の日常

自己紹介の中で，参加者自らが子どもの現在の日常生活について簡単に紹介する様子が見られた．以下の会話からは親子が過ごす時間や様子が予想される．

①「A1：今年の４月から幼稚園の未満児クラスに行くようになりました．」

②「B2：この春から，ほんとは年少なんですけどーちょっと主人の転勤がまたあるもんだから，２年保育で今年は見送って，一時保育とかを利用するように…

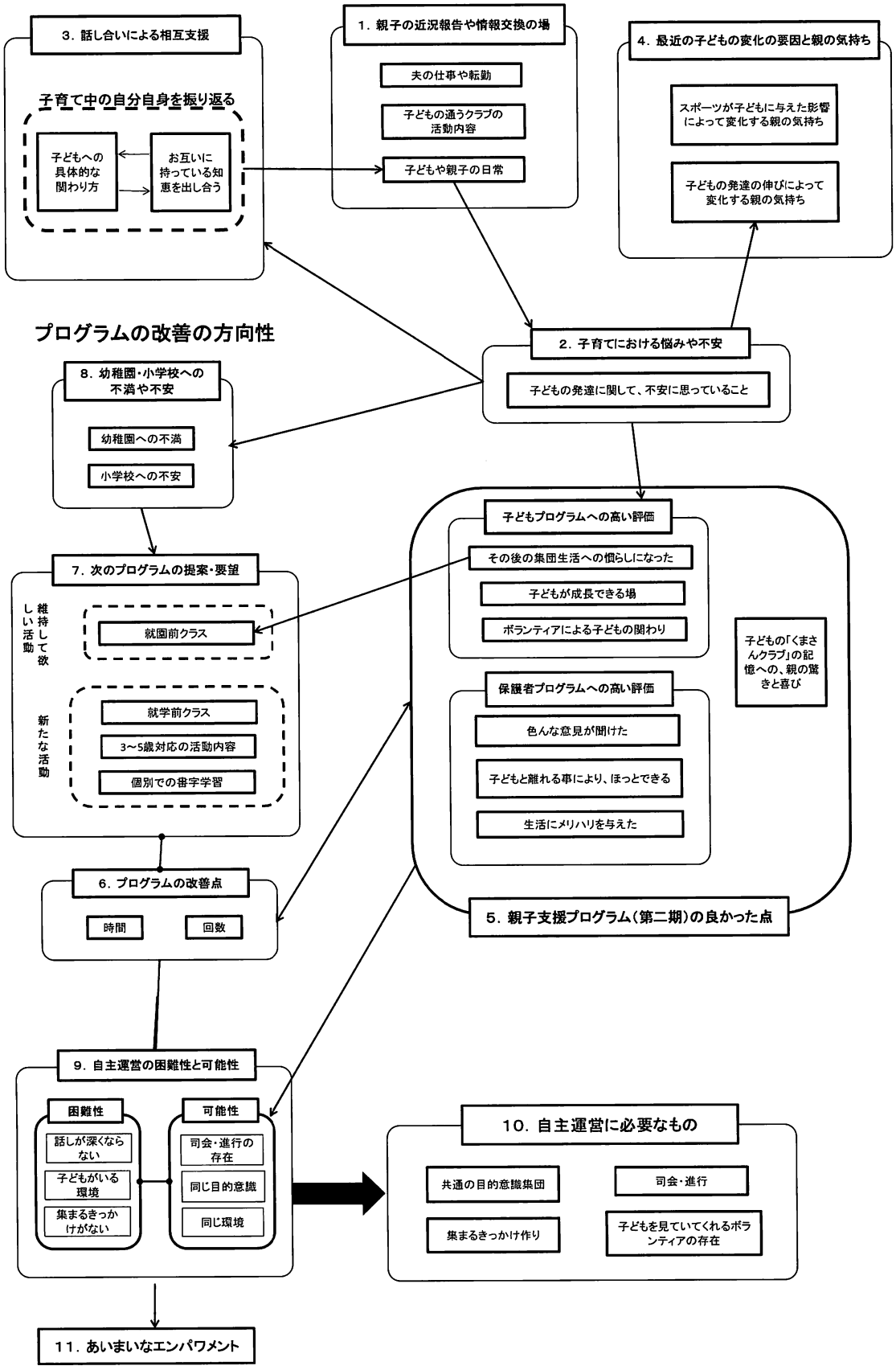

Fig.1　FGI の保護者の会話俯瞰図

週 1 行けてはないんですけどー，ぐらい目標に行っています．最近サッカーを始めたんですけど…（一同：おー!!）」（省略）「B5：最近，ちょっと充実しています．」

③（祖母の存在は重要という話題から）「司会 8：ばあちゃんなしにはねー．」（A：頷いてウンウン）「祖母4：いやぁうちはそうしょっちゅうしょっちゅうではない．ママが用事がある時だけ，ちょこっと．で，たまーにお泊りするくらいで．」「司会 32：今，基本的には今どんな…おばあちゃんが見てらっしゃるわけじゃない…んですよね??」「祖母 17：うん，うん，そうです．」「司会 33：ママと？」「祖母 18：うん．（ママとずっと一緒）」

(2) 夫の仕事や転勤

B の夫が参加していた事もあり，司会者から夫の仕事話や転勤の話がされた．転勤の日時が決定していることが分かり，それを聞いた参加者達は残念そうに頷く様子が見られ，参加者がBに会えなくなる寂しさを抱いていることが分かる．

「司会 20：転勤は，ばあちゃんちの近くに行くという可能性でもない訳ですよね？」「B11：もうなんか，全国どこに行くか分からない状態…なんでしょ？（夫に聞く）」夫：頷く．「司会：（引っ越しは）もう近いんですか？」「夫 12：8 月です．」「司会 23：もう決まり？」「夫 13：ですね．」（一同：あー…(残念そうにウンウン…)）「夫 14：どこに行くかは決まってないんですけど．」

(3) 子どもの通うクラブの活動内容

このカテゴリーは参加者の発言に対して，別の参加者が自ら話者になっていた．B の子どものサッカークラブに関する内容が大部分だが，お互いに持っている情報を提供し合っている様子が窺える．

「B43：（クラブは）市の，市の（運営）らしいです．」「A13：北部の方はそんなの充実してるらしいです…」「司会 55：北部は，北部じゃなかったっけ??」「A14：北部だけど，ちょっと…（外れ）」「A15：北部は何か結構そういうの（盛ん）…で，サッカーが強い場所なんですよ．」「B44：え!?そうなんですか?? A：（うんうん．）」「B45：えー，それは知らなかった!!」「A16：クラブチームとか（いっぱいある）」

2) 子育てにおける悩みや不安

司会者の質問に対して，保護者Aと祖母の発言からは子どもの発達に気がかりな点があるという事を示唆する発言がある．

①「司会 30：最近はじゃあ，もう今お話されたけど，幼稚園はつつがなく…」「A10：うーん……うん．（頷く）」「司会 31：うん，まあ，つつがなく．」「A11：気になるところとかはあるんですけれど，まあ楽しくやってるのでー，今いっぱい色んな刺激を受けてるから．うーん．」，「司会 103：行くようになって，なんかこれはきつそーみたいなのって感じます？」「A24：今は楽しくてしょうがないって言うのがひとつで，まだでも，友達と遊ぶとかじゃないですけどー，好きな事が出来る，まあそれでも楽しい．」

A は FGI 終了後のアンケート調査において「今，不安に思っていることや知りたい事などありましたら教えて下さい」という項目に「集団行動が出来ない」「ずっと手を洗っていること」と記入している．これらは FGI の中では出なかった内容である．

②「司会 139：○○ちゃんち，何か話とかされてました??」「祖母 59：何か言葉がはっきりわからない・・・うーーん・・・去年の暮れからだったと比べてみると・・・あんまりお喋りせん．うん…」「司会 140：でも結構増えてますよね？」「祖母 60：出てますよー，うーん，段階があるんでしょうけども，ここでこういう機会がなかったらああはいかなかったのかなぁとか．」「司会 141：そうですか〜」「祖母 61：なんか・・・言葉が・・・多くなりましたよ．」

司会者の質問に対する祖母の発言は，発言する事を少し躊躇いながらも子どもの発達において不安を抱く様子が窺えた．しかし，司会者の「*でも結構増えてますよね？*」という言葉で「*出てますよー，（省略）なんか・・・言葉が・・・多くなりましたよ．*」という発言に変化した．これは，司会者がCの子どもの成長を指摘したことで祖母の考えや見方に変化が起きたと分析する．その後，C に電話でのアンケートを行った．プログラム終了後の子どもにおける変化について尋ねたが，「特に変わりはない」とのことだった．

3) 話し合いによる相互支援

「話し合いによる相互支援」というカテゴリーは，「子どもへの具体的な関わり方」，「お互いに持っている知恵を出し合う」の 2 つのサブカテゴリーに整理出来た．

会話の流れは，基本的に司会者から発信しているが，参加者が子育てにおいての困りを発言する事は，ストレスを発散，情報交換，自分の経験が他の参加者に役立つ経験，参加者が子育て中の自分自身を振り返る良い機会になったと思われる．

(1) 子どもへの具体的な関わり方

発話は，司会者の「*最近…これは，こういう時はどうしたらいいの？っていうみたいな事ありますか？*」という質問から開始している．話題提供者となってくれたのは祖母とAであった．発言からは，祖母とAは子どもへの関わりの中で，困りや戸惑いを抱いている

様子が観察された.（以下，斜体はカテゴリーに該当する会話）

①「祖母34：でも何か，これを熱いの触ろうと，例えばしたとするじゃん??「それ，熱いよー」って言ったら何かすぐ固まって，こーっやっていじけた様な感じにならす時が．これいい事…なのかなーとも思いつつ.」「司会72：それは怖く言われるんですか？」「祖母35：「あー！ダメよっ」ってちょっと声が大きくなるじゃないですかー…そういう時が，あ～ちょっといかんかったかなぁ～って．どうなんでしょう．声が大きいんですよ，私.」

②「A19：最近かんしゃくがすごくてー，自分が1番じゃないとダメで，上の子たちの何か色々やって，上との…キー!!って.」「A20：何でも，とにかく自分が1番じゃないとダメ．（兄弟と）年が離れてるから，結構ちやほやされてることが多いから，どこでも通るって思ってる．特に，すぐ上の子に対しては，真似もしないので，絵を描いていると横から取り上げて，ビャーって描いたりとか…それでちょっと怒ると，キー!!って物が飛んで来たり，（司会：あーほんと？）…します.」

(2) お互いに持っている知恵を出し合う

ここでの発話は，(1) で話題提供者となってくれた祖母とAに，他の参加者が自分の子育て経験からの知恵を素に，一緒に考え，アドバイスしている様子が観察された.

①「司会74：え，危ない時とかはどんな風にされてますか？」「A17：先に言ったりします．先に，「熱いから触らないでねー」とか言って，離れた所に．それでも触ろうとした時にはやっぱりおっきい声が出ます～」「司会75：ほぉ～，なるほど，なるほど．先に言う，かなり名案だね!!」「祖母37：ふーーん，なるほどー!!」「司会76：（Bに向かって）危ないこととか，何か…??」「B58：もう3歳半なのでー…」「司会77：もうおっきいからね～」「B59：熱いものとか…基本的には熱い状態，どうだろ？　汁とかねー…冷ましてやる…届かない所に熱いうちは置いといてー，…え？！…うん….」「司会78：なるほど，やっぱここ1人だから手が届くんだよ．（B：そうなんですよ）冷まして渡すという…，うん，手が届かなくなる!!いっぱいいると…」「B60：そうですよねー」「司会79：熱いまま，置かれてる（笑）そこに.」「A：（頷いてウンウン.）」「B61：やっぱ言うしかないのかなー…」「祖母38：びゅーって（向こうに行って）いじけらすもん.」「B62：怒られたーって思ってるんでしょうね.」

②「司会84：（Bへ）キー!!っとかってあります??」「B63：うーーん…うちはやっぱ兄弟がいないからー，そういうトラブルは少ない方だと思うんですけどー…，かんしゃくは起こしてました，でも，2歳代，やっぱうん.」「B64：うーーん…，でも何か，手をあげたりとかー物を投げたりとかは厳しく怒る．『やっちゃいけない事でしょ』って・・・・.」

4) 最近の子どもの変化の要因と親の気持ち

「最近の子どもの変化の要因と親の気持ち」というカテゴリーは「スポーツが子どもに与えた影響によって変化する親の気持ち」，「子どもの発達の伸びによって変化する親の気持ち」の2つのサブカテゴリーに整理出来た.

(1) スポーツが子どもに与えた影響によって変化する親の気持ち

Bは子どもの発達に良い影響を与えた要因としてスポーツ（サッカー）であると答えた．ここでは，祖母とともにスポーツが子どもに与える影響としてBと祖母2人の会話が進められている．祖母には参加者であるCの子ども以外にも，スポーツをしている小学生の孫がいる為，Bとの会話が弾んだと考えられる.

「司会98：スポーツいいなーって（思われる）??」「祖母　44：いやぁ～，違いますーー．何か，完全に自立?!もう気持ちの上で自立しる．何かこうなりたーいとかってね.」「B73：分かる気がする．夢見てる．憧れっていうか…」「祖母45：憧れてますよ．出来る人に対して」「B74：大きくなったらこれをしたいって……いいと思う.」「祖母46：何歳，4歳でしたっけ??」「B75：今度4歳になります.」「祖母47：大事でしょうね，そこはねー，4歳って何も分からないのにー」「司会99：憧れがある所がすごいですよねー，その年代で.」「祖母48：うーん，いいですよね．4歳っていうその年代で.」「B76：そうですねー．もう，恵まれてるかなってそれは思いますね.」「司会100：いい時期にいいものに出会ったねー.」「B77：うんうん.」

(2) 子どもの発達の伸びによって変化する親の気持ち

子どもの成長により，今と半年前でBの気持ちに変化が生じたと考えられる発言がある.（以下，斜体はカテゴリーに該当する会話）

「司会86：2歳代は（かんしゃくが）あったみたいな感じで今言われましたよね，今はあんまりーって感じですか？」「B65：そうですねー，あんまり最近は…何か，忘れちゃうじゃないですか，育児の辛かったことかー．2歳代っていってもついこの間だけどー，私にとってはだいぶ昔，過去の話で．今の悩みって言われたらどうかなー？（夫の方を見る）」「夫19：別に….」「司会92：でも穏やかになったなぁと思われるのは，年齢のせい??」「B68：はい!!私はそう思っていますー．そういう時期が私も毎月，だいたい定期的に発

達の相談で専門の先生に診てもらってたんですけどー，その先生に，ここ3ヶ月に1回なんですけどー，ここ3ヶ月でだいぶ伸びましたねーって言われて，多分ここ数カ月くらいでだいぶ手が離れたような気がします.」「祖母40：（成長が）すごい勢いなんですねー.」「B69：そうですねー．思いますねー.」

5）親子支援プログラム（第二期）の良かった点

「親子支援プログラムの良かった点」は「子どもプログラムへの高い評価」,「保護者プログラムへの高い評価」,「子どものくまさんクラブの記憶への親の驚きと喜び」の3つのカテゴリーに整理出来た.

(1) 子どもプログラムへの高い評価

「子どもプログラムへの高い評価」というカテゴリーは「その後の集団生活への慣らしになった」,「子どもが成長できる場」,「ボランティアによる子どもの関わり」という3つのサブカテゴリーに整理出来た.

①その後の集団生活への慣らしになった

Bは子どもがその後の集団生活にすぐ馴染めることが事が出来，自身も託児付きの歯医者に行ける事にすごく喜んでいる．それは，ここでの活動が子どもに大きな影響を与えた事を指摘している.

「B81：子どもがーその後の集団生活にすごく，馴染め…うんうん…あの時にやっぱ最初は泣いたけどー，その後にこう親と会えんだーって，その時はその…先生と信頼関係を結ぶことが出来るんだとかー，そこまで分かってるかどうかは分かんないけれどー，でも導入に…結構うまく行けたのでー，多分…○○ちゃん（Aの子ども）もそれで泣かなかったんじゃないかなぁっていうのはあるけど」「B82：その後，だから一時保育に…本当だったら幼稚園なんですけど，多分（だから）すんなり泣かずに行けた…（んだと思う）．例えば，託児付きの歯医者さんだとか，そういうとこでも泣かずに…（行ける）」

②子どもが成長できる場

Bはプログラムを振り返って，子どもが親と離れる事により，親以外の人とも信頼関係を築き，その環境の中で新しい事を学習してくれたことに大きな喜びを感じている.

「B107：親とか以外の人でも…こんなに自のことをちゃんと（よく）してくれるんだっていう人がいるっていうことが分かっただけでもすごい，△△（子ども）にとっては良かったし…だから誰って話になりますよね？先生と・・・数字，個別でその子の興味に応じて…してもらったので，うちの子の場合数字にすごく，関心があってそういう時期だったので，・・・スムーズに数字が言えるようになったのもあるし・・・」「司会149：（パパへ）なんか，数字の話とか聞かれてますか？覚えてない？」「B108：パパの駐車場が2って，初めて，その…数の概念が」「司会150：日常生活でも言葉が出たんですね，その数字に関する事が」「B109：（嬉しそうに）はい!!」

③ボランティアによる子どもの関わり

Aは，ボランティアによる子どもとの関わり方について，親が気付かない視点で子どもと関わり，それを見て親が子どもの新しい部分に気付くということを示唆する発言をしている．ボランティアと子どもの関わりを客観的に見て，普段の生活を振り返る機会にもなっていると分析する.

「A8：色んな種類のおもちゃがあったのが良かった．やっぱお家だと好きな物だけになって来るから～…これは得意だけど，これはちょっと触るのが苦手だとかとかが分かって…」「司会136：そうですね，家でのおもちゃって子どもが好きな物を買うから～やっぱパターンが似通ってくる傾向がありますよね，だけど，ねぇ，色んなのがあると，このてだとこう遊ぶんだとかー.」「A9：それもちゃんと教えてもらえて，こうすると楽しいよ～って…そういうのを教えてもらったり出来たのがー，すごく良かったですね.」

(2) 保護者支援プログラムへの高い評価

「保護者支援プログラムへの高い評価」は「色んな意見が聞けた」,「子どもと離れる事でほっと出来た」,「生活にメリハリが出来た」の3つのサブカテゴリーに整理出来た.

①色んな意見が聞けた

参加者達は，毎回テーマに応じて話す機会が設けられている．その中で，全ての母親が自分の経験や思ったことを話し，みんなで考えたり，共感しあっていた．同じ話題を共有し，互いに話すということは，参加者同士の情報交換やストレス発散，思いを共感する機会であったと分析する.

「A50：お話しするっていう機会がなかなかなかったので，すごくリフレッシュになったし，色んな意見も聞けたのでー・・・楽しかったです.」Cに電話でアンケートを行った時も，「色んなお母さん達の話を聞くことが出来て良かった」と話していた.

②子どもと離れることで，ほっと出来た

本プログラムは，子どもと親が離れそれぞれが別室にて行われた．以下の会話からも分かるように，母親と子どもを少しの時間離し，親がゆっくり出来る時間を作るだけでも保護者のサポートにおいてとても有意義であったと分析する.

「B15：何か月ぶり？とかというレベルだったんで・・・別にめっちゃ離れたいという訳ではないんですけどー，離れる時間がこんなにもホッとできるのかー，とか・・・」

③生活にメリハリが出来た

本プログラムの参加者は育児と家事に追われた専業主婦であり，家の中にいることが多かった．以下の会話からも分かるように週に1度，親子で出掛ける機会を作ることは，それまでの生活リズムに良い影響を与えると共に，親子がリフレッシュする時間を与えたと分析する．

「B15：後，定期的にやっぱりあるっていうのは，自分が，他に子どもも兄弟もいないし，子どももまだ幼稚園とか行っていないので，主人が会社に行ってしまえば，もう…ダラダラしてる？区切りがないんですよね．だから，月曜日なり，毎週何曜日にこれに行くってのがあるから，メリハリにはなってましたね．」「祖母64：メリハリっていいですね．」「B116：う～ん，ですね，うん．何曜日はこれがあるからって．楽しかったですよ，自転車で来てた時も．」

(3) 子どもの「くまさんクラブ」への記憶への親の驚きと喜び

司会が今日来るまでの子どもの様子を尋ねると，Bと祖母は自ら話者になった．Aも司会者から様子を聞かれると普段の幼稚園とここでの違いを踏まえながら話す様子が見られた．子どもの記憶が半年経った今も維持している事に参加者達は嬉しい様子が観察された．

「祖母7：車から降りたらね，ニコニコして，なんかこっち方向にね，」「司会33：ここだーみたいな？」「祖母8：一人でこう，向かいました．」「司会41：○○ちゃん，さっき泣いていましたよね？」「A3：泣いてはいないんですけど，やっぱり…」「司会42：ここは別れる場所みたいな？ハハハ…」「A4：車降りる時から…」「司会43：ちょっとヤバい，みたいな？」「A5：うん．幼稚園は全然大丈夫なんですよねー．（一同：ふぅ～ん．）泣いたりもなくて，振り返ることなく行くんですけど，ここに来たとたん泣く．」「司会45：離れなきゃいけない場所じゃん（って泣く）？」「A7：（頷いてウンウン）覚えてるから逆にそういう風に…（ウンウン）」「B19：△△は，もーご連絡頂いた時からすごく楽しみにしてて，」（一同：へぇーーー!!!（驚き））「B20：そう，何かあったら「くまさんクラブ」があるよって言ったらそれを楽しみに，（一同：へぇ～～～．そういった感じで，ここ来る道も覚えていました．「あっちへ行くんだよ」って．」「祖母22：2ヶ月かな??少し前にね，椅子に座ってたら，前に来てから，これ（手遊び）して見せましたよ．」「祖母25：ここで覚えたのをして見せてくれたんだな～と思って，ほぉ～って思ったんですよ．」

6) 改善点

「改善点」というカテゴリーは，「時間」，「回数」の2つのサブカテゴリーに整理された．

(1) 時間

Bの子どもは参加者4名の中で一番月齢が高かった．当時2歳11ヶ月だったBの子どもやDの子どもにとっては，プログラムの時間を長くすることで効果が上がるとBは考えていると分析する．

「B85：回数とか，ま，色々制限があるってのも，あれなんでしょうけど，同じ時間だけ出来るんだったら，回数はもうちょっと少なくてもいいけど，時間は長い方がいい…でも2歳児はきついかな～．」「B86：そうそう，乗ってきた頃にバイバイってなってるのでー．うーん…，△△（Bの子ども）もだし，特に○○君（Dの子ども）がそういう感じだったんで」

(2) 回数

Aの子どもは参加者4名の中で一番月齢が低かった．当時1歳8ヶ月だったAの子どもにとっては，プログラムの回数を増やした方が効果が上がると，Aは考えていると分析する．

「A27：寝てたのでー，時間はそのままで，でも慣れた頃に終わりだったのでー，」「司会122：8回がね～」「A28：ちっちゃい子はもっと回数があった方がいい．」「司会123：もっと短くてもいいからー，回数が長い方が…」「A29：いい，ですけどね～」

7) プログラムの提案・要望

「プログラムの提案・要望」というカテゴリーは，「就学前クラス」，「就園前クラス」，「3～5歳対象の活動内容」，「個別での書字学習」の4つのサブカテゴリーに整理された．

(1) 就学前クラス

Aの会話からは，3歳未満の子どもと親が集うサークルは各保健センターにあるが，年齢が高くなるにつれて親子が集う機会が少なくなることを示唆する．就学を直前に控えている親は不安も多く，年齢が高くなっても子どもや親のサポートを行う必要があると分析する．

「A30：それは例えば，来春から小学生とか，年長さんだけていうクラスとかは出来ないんですかね？例えば，土曜日にー，そういう子を集めてていうかー．」「A34：でも…多分私達くらいの2歳とか位は，結構，保健センターとかに行っても，そういうサークルがあったり，また全然違うけどー，あるんでー，逆にーもっと上を～，しっかりしてもらいたい．」

(2) 就園前クラス

参加者は本プログラムが子どもに与えた影響を高く評価しており，本プログラムで経験・学習したことは集団生活に入る前の慣らしになり，子どもにとって効果的であったと発言している．よって，本プログラム

で対象にされた就園していない3歳未満の子どもと親が集う機会を設ける事は，親子をサポートする上でも大変重要であると分析する．

「司会133：今の話はだから，幼稚園の就園前は就園前でなんかちょっとそういうワンステップの場があればなーという事だし，小学校は小学校の前，幼稚園から小学校の間みたいな場があってー・・・」「A33：だから両方作ってみる!!…今回は．ちょっと大変ですけどー，人数を限って，今年は人数4･5人位にして，就園前の子と就学前の子のグループを作る…」

(3) 3～5歳対象の活動内容

参加者に「3～5歳の子どもを対象にした場合の活動内容」についてたずねたところ，トイレタイムの有無と戸外遊びの提案がされた．

「B102：3歳から5歳になると，逆にトイレタイムはいらないかな…うーん…行きたい時に…」「司会112：自分が行くってことをその時に言えるっていうのも大事かもですね～．行きたいですみたいなね．」「B103：出ないのに行くって苦痛だと思うので～，…あと，そうですね，外遊びとかが出来る環境だったらそういうのも取り入れた方がいいじゃないかな」

(4) 個別での書字学習

参加者には子どもの就学という目標があるために，文字獲得や書字学習において不安を抱いていた．それらの不安を解消するためにも本プログラムの個別指導で，子どもに応じた指導をして欲しいとの要望があった．

「A44：幼稚園でも結構みんな出来るのに自分が書けないとかで，やらなくなったりとかする子もいるんでー…，そこら辺をちょっとしてもらうと楽しいって思って，書き出したりすると思うのでー，」

8) 幼稚園や小学校に対する不満や不安

「幼稚園や小学校に対する不満や不安」というカテゴリーは，「幼稚園への不満」，「小学校への不安」の2つのサブカテゴリーに整理された．

(1) 幼稚園への不満

Aは幼稚園の対応に対して，子どもに何も支援されないまま「そのままにされている」という不満があった．Aは幼稚園側に子どもに対して何らかの支援を求めており，十分に対応されない不満を持っていた．

①「A32：やっぱ幼稚園とかだと，男の子だからとか，早生まれだからとかいう所で，そのままにされてるって子が多いんですよね．」

②「B94：小学校に入る時のステップってー，うちもだいぶ先の話なんですけどー，幼稚園がそういう役割はないんですか？幼稚園，保育園とか…」「A36：幼稚園は…いちお，字とか数字とかーそういうのはある程度教えてはもらえるんですけど，やっぱでも遅れてる子に関してはなかなかこう…手が届かない…さっき言ったみたいに，親が心配してちょっと尋ねても，そういう風なこと言われる事が多いんですよね．クラスの先生に言われると親も「あっそうかな…」って思って，結局そのままにして…」

(2) 小学校への不安

Aは小学校に通う兄弟のことで，学校側の対応に不満を持っていた．その事から，参加者は小学校への不安を抱き，学校側の子どもに対する適切な対応と一人ひとりの子どもに応じた支援を求めていた．

「A36：小学校に入って，今，特に塾とかに行ってる子が多いんで，計算まで出来て当たり前みたいなところで，始まったりとかー・・」「B95：あっそうなんですか?!」「司会136：そ，そりゃ学校が悪い!!」「A37：学校が悪いんですけどー，そういう扱いだったりとかー，」「A96：えーそうなんですか??」「A38：…学校に行けばもっと，こう…手がそっぽになるとかー…お家でしてきて下さいとか…．…それは特別な学校…(宮本を見て）ですよね??」「司会137：いやぁ，学校が悪いんじゃない?? (笑)」「A39：そういう所もあったり，でも!!学校次第というか，先生次第でもあるんですよね．」「B98：いや，私には何十年も前の話だから…，小学校入って，幼稚園で字が読めるようにってのもなってたのあるけどー，でもとりあえず，あいうえおから習うじゃないですかー…，数字も123から…だからー」「A41：結構速かったりするんですよ，そこが！出来てる子が多かったりするでしょ？」「B99：出来てるものってなってるんですかね？」「A42：一応するけど，もう分かってるよねー…みたいな，あとはもう子どもが…そのうち慣れますよーって言われる先生もいらっしゃるし．」「B100：最初につまずいちゃったらもうずっとあれですよね，ボロボロ～ってなっちゃいますよね？」「A43：なっちゃいます，子どもも楽しくなくなるんですよ．」「A45：やっぱ子どもって正直に言うじゃないですか，「書けんとー？」とか．」「司会139：はぁー・・・(溜息をついて，肩を落とす)」「A46：それでもねー，言い返せる子はいいけど…うん…」「祖母56：普通になってくればですね～・・だんだんね～．」「B101：なんか，それがつまづきの第一歩とかになったらねー，」

9) 自主運営の困難性と可能性

「自主運営の困難性と可能性」は「困難性」と「可能性」という2つのサブカテゴリーに整理出来た．

(1) 困難性

「困難性」というサブカテゴリーは，「話が深くならない」「子どもがいる環境」「集まるきっかけがない」

という3つの構成単位に整理出来た.

①話が深くならない

Bは普段の母親同士の会話では，本プログラムで話せた会話をする事が困難であるということが分かる発言があった.

「司会147：ママたちでこんな場をやるってうのはー・・・やれそうっていうか，難しそうと思われます？」「B118：ママ友だけでってことですか？」「司会：ママ友っていうか，そうですね，自分たちで何かやるー…って（いうのは）」(6秒沈黙・・・)「B119：うーーん・・・なんて言うのかな～友達になってしまっているので，こういう議論じゃないけど，なあなあみたいな話にはなるけどー・・・う～～～～ん・・・.」「祖母65：(話が）深くはならないですよね.」「B120：ですねー.」

②子どもが常にいる環境

司会者が「ママたちでこんな場をやるってうのはー・・・やれそうっていうか，難しそうと思われます？」と質問したところ，母親が置かれている環境が分かる会話がなされた.

「祖母65：(話が）深くはならないですよね.」「B120：ですねー．なんていうのかな・・・」「祖母66：中断されるでしょ？」「B121：それもありますね．子どもが常にいるから…この話をこう話したいってのも出来ないしー,」

③集まるきっかけがない

参加者達は，自主運営をすると仮定した時，どのように同じ目的意識や同じ環境に置かれた保護者達を集めるかについて，きっかけ作りの困難性を指摘した.

「司会150：ママたちでですね，どうにかしてそれこそマニュアルみたいな感じで，Aさんに渡して，Aさんが同じ目的，それこそさっき言われたけどー集まってですねー，そんなイメージ？・・・どうかなぁ～と思って．それには何が難しいのかなぁと思ったり??」「B124：集まるきっかけが難しい…」「司会151：あーー…きっかけ作りがね～，どう呼びかけるかとかですね・・・・そうですね，目的を持った者が集まればまたしやすいかもですね～.」「B125：どこでそれがあってるのを知るかとか…」「A52：声掛けにくかったりするんですよ」「B126：あーーーー（同感)」「司会152：なるほどね～…悩み持ってる??ってね（笑)」「A53：こっちから見て超気になる!!って思っても，お母さんは気にしてなかったり，余計な御世話しちゃったりするから，・・・難しい・・・.」「B127：やっぱり公的な機関じゃないとそこは難しいかなーって気はします.」「司会153：誰か他からパッとね.」「B128：そう，うんうん.」

(2) 可能性

「可能性」というサブカテゴリーは，「司会・進行の存在」「同じ目的意識」「同じ環境」という3つの構成単位に整理出来た.

①司会・進行の存在

参加者にとって司会・進行の存在は，話を進める上でとても重要であり，話の内容を深めるための仕掛け役でもあることが分かる.

「B117：ママ同士で多分話したら，こういう流れにはならないかなぁと思うんですけど，司会，進行してくれる人が間にいるからー，まとまるっていうか，だと思います.」

②同じ目的意識

参加者からは，母親だけではプログラムの運営は困難であるという事を示唆する発言がなされたが，Aからはプログラムの自主運営を前向きに考える為の発言が観察された.

(7秒沈黙・・・)「A51：お友達とかだったら，そういう話，しっかり自分も考えないって…出来ないですけど，同じ目標ていうか目的??があって集まればー，こういう話は出来ると思います．脱線することもあるけどー，でも戻って来れると思うしー，しっかり同じようなこと考えてるお母さん達が集まればー・・出来る（と思う).」

③同じ環境

Bの発言は，ここは「子どもの発達に気がかりを持つ保護者のための集団」であるという事が意識されている発言である．同じ環境で，悩みを理解し互いに共有できる母親同士が目的意識を持って参加すれば自主運営も可能であることを示唆する発言であると分析する.

「B122：育児サークルとかともまたちょっと違うと思います.」「司会149：どんなとこで（違うの）??」「B123：育児サークルはやっぱママ友を見つけるのが目的でー，この，目的って…うーーん…例えばこういう悩みがあるからこう……(ここに来ているというか）育児サークルに行っても，日常の話しかしない.」

4. 考　察

今回得られたデータは，調査対象人数は少ないが，実践の場において核心をついており，本プログラムの効果を説明し，解釈するのに有用であると思われる．また，そこから導き出されたデータを基にして保護者支援プログラム（第二期）の有用な点と改善点を探り，自主運営へ向けた方向性について考えてみたい.

1) 保護者支援プログラム（第二期）の有用な点

本研究に参加した保護者（A，B，B の夫，C，C の実母［c の祖母］）は，FGI と電話調査（C のみ）による結果から，保護者支援プログラムに参加して良かったといっていた．本研究のデータから導き出された保護者支援プログラム（第二期）の有用な点は，(1)「子どもプログラム」，(2)「同じ環境や目的」，(3)「話せる環境」，(4)「親子がリフレッシュする機会」，(5)「司会・進行の存在」，(6)「呼びかけ方法」の 6 つに整理出来た．

(1)「子どもプログラム」

参加者は，並行して実施した子どもプログラムに対して，「集団生活への慣らしになった」，「子どもが成長できる場だった」，「ボランティアの関わりが良かった」と評価している．発達に気がかりがある幼児は定形発達の幼児よりも集団生活開始時において配慮が必要であり，本プログラムは集団に入る前のリハーサルの場としても効果を上げる可能性があると考える．また，子どもは初めて親から離れ，家族以外の人と一緒に過ごした．その中で，最初は出来なかった事が回を重ねる毎に出来るようになったり，親が気付かない子どもの一面を知る機会になっていた．子どもの変容や成長を感じることは親の喜びへと繋がっていた．そしてボランティアと子どもの関わりを見て，親が普段の子どもとの関わりを振り返ったり，学ぶ機会にもなっていたと考えられる．このように考えてくると，子どもプログラムが親子に与える影響は大きく有効であったと考えられる．

(2)「同じ環境や目的」

B の*「育児サークルはやっぱママ友を見つけるのが目的でー…（省略）」*という発言からも分かるように，ママ友を見つけることが目的である育児サークルでは，本プログラム中で話す内容を話す事が困難であることが分かった．本プログラムの参加者達は，「子どもの発達に気がかりを持つ保護者」であり，同じ環境で，お互いに持っている悩みや不安を理解し，互いに共有できていた．プログラム終了後のアンケートの「自分たちでマニュアルを手がかりにサークルを運営することは可能か」という質問でも 4 人に自主運営の意思があった（宮本, 2009）．これは，本プログラムが参加者にとって有効でエンパワメントされていたことを示唆する．

(3)「話せる環境」

母親達は普段の生活において，母親同士で話をしたいが，子どもが常にいる環境ではゆっくり落ち着いて話をする機会がないことが分かった．したがって，母親だけで話す場を作るためには，安心して子どもを任せられる存在の確保が必要であると考えられる．本プログラムでは，母親がボランティアに子どもを預け，子どもと保護者が離れて過ごしていた．保護者は子どもと離れる時間が 1 時間という短い時間でも，会話することでストレスを発散し，レスパイトしていた．また，保護者同士で会話することは，互いに元気づけ，エンパワメントに繋がっていたと分析する．

(4)「親子がリフレッシュする機会」

本プログラムの参加者は，育児と家事に追われる専業主婦であり，家の中にいることが多かった．会話からも*「主人が会社に行ってしまえば，もう…ダラダラしてる？区切りがないんですよね．」*とあるように，本プログラムで週に 1 回外出する機会を作る事は，生活リズムを整え親子にとって良い影響を与えていた．外出することで，親子の楽しみが出来，リフレッシュすることに繋がっていた．

(5)「司会・進行の存在」

普段の母親同士の会話の中では本プログラムで話せたような内容を話す機会がなく，話が深くならなかったり，考えたりすることが困難であるということが分かった．しかし，本プログラムにおいて参加者達は普段話せないような子育てにおける悩みや考えを話し，それらを互いに共有する事が出来ていた．それには，話を進め，深めてくれる司会・進行の存在が大きいことが分かった．司会・進行が話を進めてくれることにより，テーマからずれることなく話が出来，参加者全員が話に参加する事が出来たと分析する．

(6)「呼びかけ方法」

参加者達は，自主運営をすると仮定した時，どのように同じ目的意識や同じ環境に置かれた保護者達を集めるかについて，きっかけ作りの困難性を指摘した．気になる保護者に自分から声をかけることは相手の気持ちを害するのではないかとの不安があり，情報の提示の仕方や，呼びかけは公的機関の協力が必要であると考えられる．本プログラムの参加者は，P 自治体 K 地区の保健センター乳幼児健診担当保健師を通して，参加者達に声が掛けられた．今回の呼びかけ方法は，参加者にとって参加するきっかけになり，有効であったと分析する．

3）保護者支援プログラム（第二期）の改善点

宮本（2009）によると，プログラム（第二期）の効果として「保護者同士の話し合い」は，「1. よい情報収集の機会」，「2. 自分を振り返る機会」，「3. 自分の情報が他の保護者の役に立つ経験」，「4. 仲間作り」，「5. ストレス発散」，「6. エンパワメント」の機会を与えることが分かった．

本研究では，1 ～ 5 の内容は確認できたものの，「6. エンパワメント」に関しては維持されていなかった．また，FGI の中で明らかになった改善点として「時

間・回数」が挙げられた.

(1) エンパワメントの維持力

宮本（2009）によると，プログラム直後の参加者は全員エンパワメントされており，自主運営に関しても大変意欲的であった．しかし，6ヶ月後の本研究では，自主運営に前向きな姿勢が見られた保護者は1名であり，曖昧なエンパワメントとなった．参加者は，意欲の高まりや仲間関係を維持していたにも関わらず，それらを維持する事が出来なかった．プログラム終了後は自主的に参加者同士で会ったり，連絡を取り合っている様子は見られなかった．したがって，参加者のエンパワメントを維持し，保護者間のピアサポートが継続する手掛かりとして，プログラム終了後も定期的に連絡を取り合ったり，顔を合わせるなどのフォローが必要であると考えられる.

(2) 時間・回数

参加者はプログラムの回数や時間に関して，年齢に応じて変えた方がいいとの考えを持っていた．参加した子どもの年齢はA：1歳8ヶ月，B：2歳11ヶ月，C：2歳3ヶ月，D：2歳9ヶ月であった．その中で年齢が低いAは「プログラムの時間はそのままでいいが慣れた頃に終わったので回数を増やして欲しい」とのことであった．またその中で年齢が高かったBは「回数はそのままか短くてもいいけど，気分が乗ってきた頃にバイバイだったので時間はもう少し長い方がいい」との意見があった．Cは，「時間も回数もちょうどいい」との意見だった．子どもの年齢や状態に合わせて，時間や回数を設定する必要があると考える.

(3) 地域での早期療育システム構築に向けて

肥後の研究グループは，CBRの考えに基づく「地域での早期療育システム」の構築を目指し，支援者を専門家に特化しない低コストのプログラムを試行・検証している．本研究で検証した保護者支援プログラム（第二期）は，参加者中心のコストの低いプログラムである．現在の専門家中心の支援は，高度な支援やプログラムの質の維持がある一方，専門家を養成するコストの高さから，支援の広がりを妨げていることが明らかになった（宮本2009）．しかし，本研究からも分かるように，保護者の抱える悩みは専門家に頼らなくても保護者相互の支援で解決し，互いに認め合い，励まし，そこからまた知識を深め合っていた．そのような経験をした保護者の中にはエンパワメントされ，本プログラムの必要性を感じ，自主運営の可能性を示唆する者もいた．したがって，今必要とされていることは，非専門家にも解決できる問題に「早期」に「出来る範囲で」支援することが出来るようになるプログラムを地域に広げることであると考えられる.

本プログラムを低コストで展開するためには保護者が中心となった自主運営が一つの方向性であると考えられる．保護者が自主運営を行うためには，プログラムに参加することでその有効性に気づいてもらい，なおかつ，プログラムの継続と展開に関与できるようエンパワメントをされることが必要となる．そのように考えると，本研究の保護者支援プログラムのもう一つの中心的目的は，「保護者のエンパワメント」となる．エンパワメントされた当事者がプログラム運営に携わることで「低コストでのプログラム」の実施可能性が高まると考えられる．本研究の保護者は，第二期プログラム直後にはエンパワメントされていたにも関わらず，半年後の本研究ではエンパワメントの困難さが示唆されている．この点を改善する方向性としてフォローアップの早期実施などが考えられる.

また，本研究の「自主運営の困難性と可能性」というカテゴリーより，「自主運営に必要なもの」が導き出された．自主運営に必要なものは，「司会・進行の存在」，「子どもを見ていてくれるボランティアの存在」，「共通の目的意識集団」，「集まるきっかけ作り」であることが分かった.

本研究で我々が担った役割を，母親や地域の非専門家が担うことが出来るように，今後も自主運営に必要なスキルやエンパワメントの維持力について研究し，プログラムの試行・検証を続けていくことが今後の課題である.

参考・引用文献

1) 宮本美哉（2009）ハイリスク児をもつ保護者への早期支援プログラム開発に関する研究，熊本大学大学院教育学研究科障害児教育専修 —平成20年度修士論文集—
2) 半田 健（2009）CBRに基づく就学前療育プログラム開発に関する研究—子どもの個別活動プログラムを中心に—，熊本大学教育学部養護学校教員養成課程 —平成20年度卒業論文集—
3) 百田好香（2009）CBRに基づく就学前療育プログラム開発に関する研究－プログラム運営と子どもの集団活動プログラムを中心に—，熊本大学教育学部養護学校教員養成課程 —平成20年度卒業論文集—
4) 楢木野 薫（2008）障害のある子どもを持つ保護者のサポートプログラム開発に関する研究，熊本大学大学院教育学研究科障害児教育専修 —平成19年度修士論文集—
5) 筒井迪子（2008）就学前療育プログラム開発に関する試行的研究～子ども用プログラムの検討～，臨床・社会学研究室研究収録 第5巻 第3号 —平成19年度卒業・修了・修士論文集—

6） 上野　茜（2007）地域における療育活動プログラムプログラムに関する研究―親支援プログラムの分析―，熊本大学教育学部　―平成18年度卒業・修了論文集―
7） 肥後祥治（2003）地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）からの日本の教育への示唆，特殊教育学研究　41（3）345-355
8） 安梅勅江（2001）グループインタビュー法，医歯薬出版株式会社
9） 安梅勅江（2005）コミュニティ・エンパワメントの技法，医歯薬出版株式会社
10） 山上敏子（1998）お母さんの学習室，二瓶社
11） マルコム・ピート（2008）監修　田口順子訳，CBR 地域に根ざしたリハビリテーション，明石書店
12） 井上雅彦・柘植雅義　編著（2007）発達障害の子を育てる家族への支援，金子書房